

界差別について

— 南北両阿毘達磨の修行道における位置づけ —

金 宰晟 (正圓)

<目次>

0. 序論

1. 界差別の意味

1.1. パーリ文献における「界差別」

1.2. 有部の『中阿含經』における「界差別」

1.3. 四界の意味

2. 修行道において「界差別」の位置

2.1. 初期經典における「界差別」

2.2. 南方上座仏教の修行道において「界差別」の位置づけ

2.2.1. 禪定の主題（業処）としての「界差別」

2.2.2. 観修習に用いられる「四界差別」

2.3. 北方有部の修行道において「界差別」の位置づけ

2.3.1. 『大毘婆沙論』における「界差別」

2.3.2. 『阿毘曇心論經』『雜阿毘曇心論』における「界差別」

3. 結論

<参考文献及び略語>

0. 序論

漢訳阿含經やパーリ・ニカーヤという初期仏教經典で説かれている多様な修行道は、部派仏教に受け継がれ、各部派独特の修行道が展開された。インド部派仏教の中でもっとも勢力が大きかったインド北方の説一切有部の論書と三蔵や注釈文献が完全に伝わっている南方の上座仏教の論書の中

心として、本論では「界差別」という修行道を取り上げ、この「界差別」という修行道が初期仏教以来、説一切有部と南方上座仏教の修行道の中で如何なる位置を占めていたかを明らかにしたい。漢訳阿含經¹とパーリ・ニカーヤそして、パーリ文献としては『清淨道論』(Visuddhimagga, Vism)を、有部の文献としては『大毘婆沙論』『雜阿毘曇心論』等の論書を中心にこの問題を考察してみる。²

1. 界差別の意味

1.1. パーリ文献における界差別

周知のように、修行道としての「界差別」は、パーリ經典では主に、四念処の中での身念処の一項目で、「四界差別」として次のように説かれている。

次にまた、比丘達よ、比丘は、他ならぬこの身体を、あるがままに、置かれたままに、要素（界）から觀察する。この身体には、地の要素（地界）・水の要素（水界）・火の要素（火界）・風の要素（風界）が存在すると。³

¹ 阿含經の中でも有部の所伝と云われている『中阿含經』と『雜阿含經』を中心に考察する。阿含經の所属部派に関しては、榎本文雄 [1984] 参照。

² 「界差別」という修行道は、現在、ミャンマーを中心として南方上座仏教国や欧米で幅広く行われている修行法の一つである。特に、マハーシ サヤドウ (Mahasi Sayadaw, 1904-1982) によって用いられた修行法は、長部の『大念處經』の修行法を根拠にしながら「界差別」を中心としている。マハーシ サヤドウの修行法に関しては金宰晟 [1997:46, 52] 参照。

³ 『大念處經』DN2, 294 = 『念處經』MN1, 57 = 『身念經』MN3, 91:

puna ca param bhikkhave bhikkhu, imam eva kāyaṃ yathāhītaṃ yathāpaṇiṭaṃ dhātuso paccavekkhati, atthi imasmim kāye paṭhavīdhātu āpodhātu tejodhātu vāyodhātūti.

このように身体を四つの要素から観察する修行道を「四界差別」*catudhātuvavattthāna*と命名したのは、パーリ文献では『清浄道論』等の註釈文献ではじめて見られる。そして『清浄道論』では、界作意 *dhātumanasikāra* , 界業処 *dhātukammaṭṭhāna* , 四界差別 *catudhātuvavattthāna* とは同じ意味であり、⁴ 界の分別 *dhātupabbheda* とも云う。⁵

上記の「四界差別」が説かれている三つの經典は、長部の『大念処經』*Mahāsātipaṭṭhāna-sutta*、中部の『念处經』*Satipaṭṭhāna-sutta*、『身念經』*Kāyagatāsati-sutta* であり、3ヶ所すべて身念処の一つとして説かれている。

そして『清浄道論』では、禪定修行の40種類の主題(業処 *kammaṭṭhāna*)の一つとして「四界差別」を非常に詳しく解説している。上記のように身念処の一項目として簡略に「四界差別」を説明した後に、『象跡喻大經』*Mahāhatthipadūpama-sutta*⁶、『教誡羅・羅大經』*Mahārāhurovāda-sutta*⁷、『界分別經』*Dhātuvibhāga-sutta*⁸を引用しながら詳しく「四界差別」を分析している。⁹これらの三つの經典で説かれている「四界差別修習」を簡単に整理すれば、髪 *kesā*・毛 *lomā*・爪 *nakhā*・齒 *danṭā* 等という身体を構成している部分を地界・水界・火界・風界にあてはめながら分析的に観察することである。

1.2. 有部の『中阿含經』における「界差別」

しかし、有部所伝の『中阿含經』¹⁰の『身念經』¹¹と『念处經』¹²には、

⁴ Vism, 347: dhātumanasikāro dhātukammaṭṭhānaṃ catudhātuvavattthānaṃ ti atthato ekaṃ.

⁵ Vism, 352.

⁶ MN1, 184ff.

⁷ MN1, 421ff.

⁸ MN3, 237ff.

⁹ Vism, 347-370. 『清浄道論』の「四界差別修習」は、先行する『解脱道論』の「観四大」(T32,438b-40b)に該当する。『解脱道論』では、『清浄道論』より簡略に説明されている。両論に対する詳しい比較研究は Bapat [1937:82-84] 参照。

¹⁰ 『中阿含經』が説一切有部系に帰属されるということに関しては、榎本文雄 [1984:97-

四界に空界と識界とが加われ、六界が提示されている。¹³

有部の阿毘達磨において身念処の中で「界差別」(界方便)の「界」の内容は六界を意味するようになったのは、上記の『中阿含經』の中の經典の影響であると見てもよからう。¹⁴

8] 参照。

¹¹ 『中阿含經』卷第二十, No. 80, T.1,554c-557c, 特に、観身諸界に該当する 556a26-7 に次の如くである。

「復次比丘修習念身。比丘者、観身諸界。此身中有地界水界火界風界空界識界」。

¹² 『中阿含經』卷第二十四, No. 98, T.1, 582b-584b, 特に, 583b17-9

「復次比丘觀身如身。比丘者、観身諸界。我此身中有地界水界火界風界空界識界」

¹³ パーリの『念处經』と中阿含經の『念处經』との比較研究は、田中教照 [1993:150-168] 参照。

面白いことに、所属部派が不明である『増一阿含經』(榎本文雄 [1984:102], 水野弘元 [1996: 457-9]) には四界が説かれている。T.2, 568a23-9.

「復次比丘、還觀此身有地種耶、水火風種耶。如是比丘、観此身。復次比丘、観此身分別諸界。此身有四種...有地水火風種」

¹⁴ 例えば、有部阿毘達磨の中で身念処の界差別の内容を提示している『阿毘達磨法蘊足論』(T.26, 476a28-b3)を見てみよう。

「復次・偈。於此內身、觀察思惟諸界差別。謂此身中、唯有種種地界水界火界風界空界識界。如是思惟諸界相時、所起於法簡摺乃至毘鉢舍那、是循內身觀、亦名身念住」

『雜阿毘曇心論』にも「不淨觀」、「安般念」と共に三度門の一つとして提示されている。「界方便觀」は六界に対する觀察である。T.28, 908b10-11.

「能於自身界方便。観此身種種自性種種業種種相、謂地等六界」

『瑜伽師地論』『声聞地』の五つの淨行所縁の一つとしての「界差別所縁」についての「界」も六界である。T.30,430a14-15.

「云何界差別所縁。謂六界差別。一地界二水界三火界四風界五空界六識界」

「声聞地」の五つの淨行所縁に関しては、釋惠敏 [1994] 参照。特に五停心觀に関しては、p.129 参照。

ちなみに、『大般若經』には、四界が提示されている。

「審觀自身、如實念知四界差別。所謂地界水界火界風界」T.5,298b13-4.

1.3. 四界の意味

修行道としての「四界差別」において四界の意味解釈は、パーリ文献と有部の阿含経や論書がほとんど一致している。簡単に言えば、地界は堅性・固性、水界は結著性・流動性、火界は遍熱性・熱煖性、風界は支持性・浮動性である。¹⁵

2. 修行道において「界差別」の位置

2.1. 初期經典における「界差別」

「界差別」という修行道は初期經典においては、四念処の中の身念処の一項目として（『大念處經』等）あるいは、五蘊（五取蘊）の色蘊（色取蘊）としての四大の分析において（『象跡喻大經』、『象跡喻經』T.1,464b-67a）、また六界（地水火風空識）として（『界分別經』、『六淨經』MN3, 30-37. esp. p.32）説かれている。

これらの初期經典で登場する「界差別」という修行道は、心を一つの対象に集中する（心一境性）禪定の側面より、四大（四界）は無常、無我であり、滅尽の性質を有するもの（*khayadhammatā*）、壊滅の性質を有するもの（*vayadhammatā*）、変異の性質を有するもの（*vipariṇāmadhammatā*）である¹⁶こと等を知る智慧の側面が重点的に教えられている。このように智慧の側面から言えば、漢訳阿含とパーリ・ニカーヤにおける「四界差別」

¹⁵ yo imasmim kāye thaddhabhāvo vā kharabhāvo vā, ayaṃ pathaviḍhātu ; yo ābandhanabhāvo vā dravabhāvo vā, ayaṃ apodhātu ; yo paripācanabhāvo vā uṇhabhāvo vā, ayaṃ tejodhātu ; yo vitthambhanabhāvo vā samudīranabhāvo vā, ayaṃ vāyodhātū ti. Vism, 351-2.

「地界云何。答堅性...水界云何。答濕性...火界云何。答煖性...風界云何。答輕等動性」『大毘婆沙論』卷第七十五, T.27, 387c-388b.

¹⁶ MN1,185ff., MN3,32, MN3, 240., T.1,464c27-9: 「色法...は破壊法は滅尽法離散之法」。また初期經典の中で五取蘊の無常・苦・無我等を説く經典に関しては森 章司 [1995:281ff] 参照。

は観 *vipassanā* という修行道として位置づけられる。

2.2. 南方上座仏教の修行道において「界差別」の位置づけ

2.2.1. 禪定の主題（業処）としての「界差別」

先述のように（1.1.）, 「四界差別」が独立した修行道としてパーリ文献に登場するのは、註釈文献からである。そして、「四界差別」に関する詳しい分析説明は『清浄道論』の「三昧の解説 *samādhiniddesa*」の中（Vism, 347-370）で施されている。

ここで、『清浄道論』における「四界差別」に関して注目したい点は、「四界差別修習」によってもたらされる禪定である。「四界差別修習」によって得られる禪定は近行定 *upacāra-samāhi*¹⁷である。『清浄道論』に次のように云う。

‘地界’, ‘水界’と界のみにより, (即ち) 非有情により, 無命者により, 注意を傾き, 思惟し, 観察するべきである。このように努力しつつある彼に, 久しくない内に, 界の差別を照らす智慧によって獲得される三昧—自性法を対象としているために安止(定)に到達できず, 近行(定)のみの三昧が生起する。¹⁸

pathaviḍhātu āpodhatū ti dhātumattatto nissattato nijjivato āvajjitabbam

¹⁷ 近行定に関しては金宰晟 [1995] 参照。

¹⁸ 自性法を対象としている禪定の主題（業処）には、十随念の中で出入息念と身念を除いた八随念、食厭相、四界差別、識無邊処、非想非非想処の12業処である。

tathā dasasu anussatisu ṭhapetvā ānāpānasatiṃ ca kāyagatāsatiṃ ca avasesā atṭha anussatiyo, āhāre paṭikūlasaṇṇā, catudhātuvavatthānam, viññāṇaṇicāyatanam, nevasaṇṇānāsāṇāyatanan ti imāni dvādasa sabhāvadhammārammanāni. Vism, 113.

これら12業処の中で、無色定である識無邊処、非想非非想処を除いた10業処は、近行定をもたらす。

kāyagatāsatiṃ ca ānāpānassatiṃ ca avasesā atṭha anussatiyo, āhāre paṭikūlasaṇṇā,

catudhātuvavatthānan ti imān' eva h' ettha dasa kammaṭṭhānāni upacārāvahāni. Vism, 111.

manasikātabbaṃ paccavekkhitabbaṃ. tass' evaṃ vāyamamānassa na ciren' eva
dhātupabbhedāvabhāsanapaññāpariggahito sabhāvadhammārammaṇattā
appaṇaṃ appatto upacāramatto samādhi upajjati. Vism, 352.

ここで我々は「四界差別修習」によって智慧が得られ、その智慧によって定（近行定）が生起するという解釈を確認することができる。この近行定によってさらに観修習が進んでいくことになるであろう。¹⁹

2.2.2. 観修習に用いられる「四界差別」

周知のように、『清浄道論』において実践的な観修習 *vipassanā-bhāvanā* は慧体 *paññā-sarīra* と云う五清浄すなわち、見清浄・度疑清浄・道非道智見清浄・行道智見清浄・智見清浄²⁰として展開する。五清浄の中で、最初の見清浄は名色を如実に見ることであり、²¹ ここで、「四界差別」が説かれている。

次に純観行者あるいは、この止行者は四界差別において説かれたそれぞれの界の把握門の何れかの門によって簡略にあるいは詳しく四界を把握する²²

¹⁹ 定と慧とのこのような相好関係は、まさに『法句經』の次の詩を連想させる。

智慧なき者には禅定がない。禅定なき者には智慧がない。

禅定と智慧が備わっている者彼こそが涅槃の近くにいる。

natthi jhānaṃ apaññassa paññā natthi ajhāyato

yamhi jhānaṃ ca paññā ca sa ve nibbānasantike. Dhṛp 372.

²⁰ dīṭṭhivissuddhi, kanthāvitaraṇavisuddhi, maggāmaggañānadassanāvisuddhi,

paṭipadāñānadassanavisuddhi, ñānadassanavisuddhi ti imā pañcavisuddhiyo sarīraṇ ti. Vism, 587

²¹ nāmarūpānaṃ yāthāvadassanaṃ dīṭṭhivissuddhi nāma. Vism, 587.

²² suddhaviṇṇāyāniko pana ayam eva vā samathayāniko catudhātuvavatthāne vuttānaṃ tesam tesam dhātuparigamamukhānaṃ aññataramukhavasena saṅkhepatō vā vitthārato vā catasso dhātuyo parigaṇhāti. Vism, 588.

ここで「四界差別」という修行道が純観行者²³が修める修行道として明確に提示されている。四禅等の禅定に依らない純観行者は、次のような経説から慧解脱者として理解することが出来る。

比丘達よ、如何なる人が慧によって解脱した人（慧解脱者）であろうか？
ここにある人が色を超越し、無色である平穩なる解脱を身体で経験することなく住している。しかし、彼は智慧によって見ることにより、煩惱（漏）が完全に消滅している。比丘達よ、この人を慧解脱者と呼ぶ。²⁴

慧解脱者とは四色禅や四無色禅という安止定としての禅定の体験がなく、煩惱を消滅した阿羅漢を意味する。²⁵ このように慧解脱の阿羅漢になる最初の修行道として「四界差別修習」は位置づけられていると思われる。²⁶

²³ 無得定者は純観行者あるいは乾観行者である。ajhānalābhi suddhaviṇṇāyāniko sukhaviṇṇāyāniko va. Vism-mhṭ [m:2300], [b:2, 474].

²⁴ katamo ca bhikkhave puggalo paññāvimutto. idha bhikkhave ekacco puggalo ye te santā vimokhā atikkamma rūpe āruppā te na kāyena phassitvā viharati, paññāya cassa disvā āsavā parikkhīṇā honti. ayaṃ vuccati bhikkhave puggalo paññāvimutto. MN1, 477-8. (=Pg,14) 『阿毘達磨集異門足論』T.26,436a2-4.

「云何慧解脱補特伽羅。答若補特伽羅。雖於八解脱身未証具足住。而已以慧永尽諸漏。是名慧解脱補特伽羅」

²⁵ 禅定と智慧に関連して、初期仏教において阿羅漢になる修行道には大きく二つの流れがあったことに関しては多くの研究がなされている。即ち、阿羅漢果を得るために禅定（四禅あるいは八禅）の体験が必要か必要ではないかの問題である。この問題に関する研究の歴史は、金宰辰[1995]、下田正弘[1996]を参照されたい。

²⁶ 二つの初期経典から、慧解脱の比丘が多く存在していた事実を確認される。

(1) 500 人の慧解脱比丘は四禅がなく漏盡者になったという経典（雜阿含 14,『須深』No. 347, T2, 96b25-98a12=SN2, 119-128 Susīmo -sutta)

(2) 五百の比丘（阿羅漢）の中で三明・俱解脱・慧解脱の数が説かれている経典（雜阿含 1212 『自恣』T.2, 330a-c., SN1,190-2, pavāraṇā) 雜阿含経では三明 90 名、俱解脱 90 名、他は

2.3. 北方有部の修行道において「界差別」の位置づけ

有部では「界差別」の「界」は六界を指していることはすでに検討した通りである。そして、有部の論書においては「界差別」とは「六界差別」を意味する。

有部阿毘達磨の発達には三段階に分けられる²⁷。三段階で発達した論書の中で「界差別」「界方便」が有部の修行道の体系に登場するのは、『大毘婆沙論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』²⁸程度である。

2.3.1. 『大毘婆沙論』における「界差別」

先ず、『大毘婆沙論』では、記憶と忘失に関する議論の中で、界方便という項目だけが、不浄観と持息観と並んで提示されている。

このように、先に不浄観を起し、途中で忘失し、後に以前の所作の如く加行によって、再び記憶する。先に持息念と界方便を起す時もまたこのようである。²⁹

全部慧解脱であると説かれているが、SN では 500 名の比丘の中で、三明、六神通、俱解脱が各々 60 名であり、それ以外は慧解脱であると云う。

²⁷ 有部阿毘達磨の発達に対しては江島惠教 [1988:164-8] によって整理してみれば次のようである。

- (1) 初期段階：経典の註釈を施す段階 — 『集異門足論』『法蘊足論』
- (2) 経から独立し、独自の研究が為された段階 — 『識身足論』『界身足論』『施設論』『発智論』『大毘婆沙論』
- (3) 綜合化、体系化段階 — 『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雜阿毘曇心論』『俱舍論』『阿毘達磨順正理論』等。

²⁸ これら阿毘曇心論系と『大毘婆沙論』の修行道の比較研究としては、田中教照 [1975] 参照。

²⁹ 「如是先起不浄観，中間忘失，後因如前所作加行還得記憶。先起持息念界方便亦爾」T.27,

このように、先に不浄観を起し、途中で忘失し、それを捨て、また持息念かあるいは界方便を起しても、後にすべて記憶出来なくなる。先に持息念か界方便を起す時もまたこのようである。³⁰

これらの記述を見る限りでは、『大毘婆沙論』においては、少なくとも予備的な修行（加行，prayoga）として不浄観と持息観と共に界方便が用いられていたことは分かる。

次の修行道の体系の中では、界方便という修行道は省略されている。

若順次第説諸功德者，應先説不浄観或持息念等，次説念住，次説三義観，次説七處善，次説煖，次説頂，次説忍，然後應説世第一法。若逆次第説諸功德者，應先説阿羅漢果，次説不還，次説一來，次説預流，次説見道，然後應説世第一法。 T. 27, 5c1-9.

ここでの議論の内容は、諸々の功德法の中で世第一法を先に説く理由を説明していることですが、我々はここで、『大毘婆沙論』での修行道の順序を知ることが出来る。その順序とは、不浄観或持息念等 → 念住 → 三義観 → 七處善 → 煖 → 頂 → 忍 → 世第一法 → 見道 → 預流 → 一來 → 不還 → 阿羅漢果である。

ここで「不浄観或持息念等」の中に「界方便」を加えることは可能だろうか？「三念住加行」として説かれている次の説明に依ればそれは可能である。何故ならば、界作意（界方便）は不浄観と持息観と共に念住の三つの予備的な修行（三加行）として明確に提示されているからである。

問何謂念住加行。云何自相種性雜縁，及聞思修所成念住生起次第。答不

58a5-7.

³⁰ 「如是先起不浄観，中間忘失，捨之復起持息念或界方便後皆不憶，先起持息念界方便亦爾」

T.27,58b11-3.

淨觀持息念界作意，是謂念住加行。則此爲先入自相種性身念住。則身念住爲先入自相種性受念。 T.27,941c1-6.

以上のように、界方便という修行道は『大毘婆沙論』で念住の三加行の一つとして位置づけられる。

2.3.2. 『阿毘曇心論経』『雑阿毘曇心論』における「界差別」

『阿毘曇心論経』と『雑阿毘曇心論』とは『阿毘曇心論』の注釈的な論書である。これらの論書の中で、先ず、『阿毘曇心論経』では、『大毘婆沙論』と同じく、不浄観、阿那波那（持息念）と共に、界入（界差別）が三方便観として説かれている。³¹

そして、『雑阿毘曇心論』には、三度門として不浄観、安般念、界方便観が説かれ、特に、界方便観に対して有部論書の中でもっとも詳しい説明を施している。³² ここで、説かれている「界」というまでもなく、地水火風空識の六界である。

これらの三方便観を予備的な修行道として、四念住 → 四善根（煖・頂・忍・世第一法） → 見道 → 修道（預流 → 一來 → 不還 → 阿羅漢向） → 無学（阿羅漢果）として修行道が整理される。

しかし、『雑阿毘曇心論』を参考しながら著された『俱舍論』では、界差別（界方便）を除いて、不浄観と持息観との二門を修道に悟入する要門（*dve avatāramukhe*）³³として立てるようになる。

貪欲が強い人々と大まかな考察（尋）が強い人々は、不浄[観]と持息念とによってそこ（修習）に悟入する。³⁴

³¹ T.28, 848c4-5.

³² T.28, 908b1-23.

³³ AKbh. p. 341.6-7. *ukte dve avatāramukhe*.

³⁴ *tatrāvatāro 'subhayā cānāpānasmṛtena ca / adhirāgavitarkāpām //6-9a-c// AKbh. p.337.8-20.*

このように、念住の予備的な修行道から「界差別観」が外されていることは、『大毘婆沙論』でも確認される。

ある人々は云う（有説）。有情は仏法の真の甘露門に入るために次の二種を観ずる。一には不浄観、二には持息念である。不浄観は四大から派生した色（造色）を観ずることであり、持息念は〔地水火風の四〕大種を観ずることである。³⁵

ここで「有説」として紹介されている説が世親の『俱舍論』では定説として受け入れられているかも知れないが、有部阿毘達磨における不浄観と持息観との二門を修道に悟入する要門（*dve avatāramukhe*）と見なす問題については別考で取り扱うことにしたい。

3. 結論

阿含経やパーリ・ニカーヤのような初期經典の段階で「界差別」という修行道は、南北両仏教伝統がほぼ同じ意味を保っていたが、部派特有の阿毘達磨が発達するに従って、部派的な解釈が施され、各部派の修行道の中で位置づけされていることが明らかになった。以上、考察した内容を簡単に纏めてみる。

初期經典（阿含経とパーリ・ニカーヤ）において「界差別修習」は、観 *vipassanā* という修行道として位置づけられる。

『清浄道論』を中心とした南方上座仏教の阿毘達磨では、智慧を得る観

「入修要二門不浄観息念，貪尋増上者如次第應修」 T. 29,117b6-7.

「得入修観偈曰。入修由二因。不浄観息念。釋曰。何人因不浄観入修。何人因阿那波那念入修次第。偈曰。多欲多覺観」 T. 29,269c8-11.

³⁵ 「有説，有情観此二種。爲入佛法眞甘露門。一不浄観。二持息念。不浄観造色，持息念観大種」 T. 27, 662c8-10.

法の側面と、観修習の根拠となる近行定として位置づけられる。そして、四禅等の禅定を観修習より先に修習しない純観行者は、「四界差別修習」を通して、慧解脱に到達する。

有部の阿毘達磨では、『大毘婆沙論』『雜阿毘曇心論』を中心に四念住の予備的修行（加行）として、不浄観、持息観とともに三方便門として位置づけられる。

＜参考文献及び略語＞

* Pāli Text とその略語は *Critical Pāli Dictionary*(CPD) Vol.1 の Epiloegomena 参照。

* 漢訳阿毘達磨文献のデータベース利用に際して、大藏經テキストデータベース研究会 (SAT), 瑜伽行思想研究会, 東京大学仏教青年会が作成したデータを活用することが出来た。ここで関係者方々に深く感謝の意を表す。

Akbh - Abhidharmako.cbhaa.sya, ed. By P. Pradhan, Tibetan Sanskrit Works Series vol. 8, Patna, 1967.

Vism-mhṭ - *Visuddhimagga-Mahāṭīkā (Paramatthamañjūsā)*.

1. [m] (Mizuno ed. Not published)

Romanized Ed. by Mizuno Kogen.

2. [b] (Burmese Chatta Saṅghayana edition.

Vols. 2, Yangon, 1960.

T - 『大正新脩大藏經』

Bapat, P.V.

[1937] *Vimuttimaggā and Visuddhimaggā : A comparative study*, Poona.

江島惠教

[1988] 「経と論（一）－ 経から論へ」『インド仏教2』岩波講座・東洋思想第九巻, 東京: 岩波書店, pp.153-170.

榎本文雄

[1984] 「阿含經典の成立」『東洋學術研究』23-1, 東京: 東洋哲学研究所, pp.93-108.

金宰晟

[1995] 「『清浄道論』における刹那定と近行定－ Samathayāna と Vipassanāyāna の接点－」『インド哲学仏教学研究』3, 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室, pp.3-16.

[1996] 「南方上座部仏教における修行の理論と実践－ タイとミャンマーの現地調査に基づいて－」『パーリ学仏教文化学』10, pp.39-63.

下田正弘

[1996] 「《さとり》と《救い》－ インド仏教類型論再考」『宗教研究』70-1, pp.25-46.

釋惠敏

[1994] 『「声聞地」における所縁の研究』, 東京: 山喜房仏書林.

田中教照

[1975] 「阿毘曇心論系と大毘婆沙論の修行道のちがいについて」『印度学仏教学研究』24-1, pp.172-173.

[1993] 『初期仏教の修行道論』 東京: 山喜房仏書林.

森章司

[1995] 『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』東京: 東京堂出版.

水野弘元

[1964] 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』東京: 山喜房仏書林 (1978 改訂版).

[1996] 『仏教文献研究』水野弘元著作選集第一巻, 東京: 春秋社.

キム チェ ソン (チョン ウォン)
 <東京大学大学院博士課程>

<キーワード>

界差別, 四界差別, 修行道, 慧解脱, 観修習, 加行, 上座仏教, 有部阿毘達磨, 『清浄道論』, 『大毘婆沙論』, 『阿毘曇心論経』, 『雜阿毘曇心論』.

『法華経』第三類六品の意義について

金 榮生 (慧學)

<目次>

- 一 はじめに
- 二 六品概観
 - 1 救済者としての菩薩像の顕示
 - 1) 薬王菩薩本事品
 - 2) 妙音菩薩品
 - 3) 観世音菩薩普門品
 - 2 経巻護持への引導と保護
 - 1) 陀羅尼品
 - 2) 妙莊嚴王本事品
 - 3) 普賢菩薩勸発品
- 三 第三類存在の意義
 - 1 第三類の性格
 - 2 六品付加の背景
- 四 おわりに

一 はじめに

法華経を類別に区分し、いわゆる第一類・第二類・第三類などと呼ぶのは二つの意味を持つと言える。その一は、今までの成立史的研究の結果なされた時期的分類であり、それは法華経が一定の期間を通して段階的に付加し増広されたと見る立場から出た用語である。その二は、法華経を内容的に分類したことだが、こういう分類ができるのは、法華経が何品ずつ同じ主義群に纏められるからであり、その纏まりはまただいたい三類に分類できるということである。この両者は概ね